

みんな、待っているよ

「ちがう学校なんていやだ。知らない子ばかりでしょ。」

病気で入院したわたしに、お母さんは「院内学級」に通うようにすすめてくれた。院内学級は、病気

やけがで長く入院する子どもたちのためにつくられた、病院の中にある学校だ。

「わたしは、三年三組がいいの。友達とはなればなれになっちゃうよ……。」

「えみちゃん、そんなこと言わないで。退院したら、三年三組にもどること

ができるんだから。勉強のこともあるし、新しい友達もできるわよ。」

お母さんの言葉で、わたしはしぶしぶ院内学級に通うことにした。

次の日、わたしはお母さんと院内学級に登校した。わたしが入院している

三階から階段を上がった四階だから、すぐに着いた。教室が二つだけの「小

さな学校」だ。教室に入ると、笑顔でいっぱい田中先生がむかえてくだ



さった。

「よく来ましたね。待っていましたよ。」

マスクをした子どもや車いすにのった子ども、点てき台をおした子どもが集まってきた。「おはよう」と、みんなとてもうれしそうにあいさつをする。わたしにも、「おはよう」と言ってくれた。

ここは、小学校一年生から六年生までの子どもがいつしよの学級だ。

授業が始まった。田中先生は、とても分かりやすく教えてくださった。休み時間は、みんなが楽しそうに話をはじめた。昨日見たテレビの話、今度発売されるゲームソフトの話、……。

(三年三組の教室みたいだな……。)

三年三組のみんなを思い出したわたしは、まどの外をじっと見ていた。

「どうしたの。」

四年生のあさみさんだ。あさみさんは、わたしが来ることを、とても楽しみにしてくれていたらしい。わたしは、あさみさんたちとなぞなぞをしたり、あやとりをしたりして、楽しく遊んだ。

「みんな、友達だよ。」

あさみさんの言葉に、わたしは、小さく「うん」とうなずいた。

院内学級に通い始めて二週間がすぎたとき、わたしは、大きな手術しゅじゅつをすることになった。院内学級に通うのも、しばらくはお休みだ。

手術の前の日。わたしは、お父とうさんと病室びやうしつにいた。

「ねえ、お父さん、またみんなと勉強べんけんできるかなあ……。」

「みんなって……。」

そこに、院内学級の田中先生がたずねて来てくださった。

「調子ちやうしは、どうですか。あなたが手術しゅじゅつでしばらくお休みすると聞いて、あさみさんやみんなが、絵をかいてくれましたよ。」

そう言って田中先生は、絵をさし出した。わたしの顔が真まん中に

大きくかいてあり、そのまわりにみんなや先生の顔がある。そして、そこにはメッセーじジもあった。



えみちゃん。手術をがんばってね。早く院内学級に来てね。
みんな、待っているよ。

わたしは、思わずにっこりとほほえんだ。

その日の夕方、わたしのところに、手紙がとどいた。三年三組のみんなやたんにの^{うえやま}上山先生からの手紙だった。

えみちゃん、体の調子はどうですか。

来週は、遠足です。今年は水族館にいきます。ペンギンもいるそうです。えみちゃんと、行きたいな。

だから今は、しっかりと病気をなおしてください。えみちゃんが、退院して学級に来るのを、みんな、待っているよ。

「お父さん、わたし、手術をがんばって、早く院内学級に行くよ。」

そして、早く退院して、三年三組に行くよ。」

わたしは、お父さんにたのんで、みんなの絵と手紙を、ベッドの横^{よこ}のかべにはってもらった。

